

**東大和市立小・中学校版
感染症予防ガイドライン
(新型コロナウイルス感染症)**



令和4年2月22日改訂
東大和市教育委員会

目次

※◆印のある部分は、改訂版において新たに掲載した項目や、追記事項がある項目です。

本ガイドラインについて・・・・・・・・・・・・・・・・	2
感染症対策に関する基本的な考え方・・・・・・・・	2

I 学校運営編

1 感染症予防策の徹底

(1) 児童・生徒への指導 ◆・・・・・・・・	3
(2) 児童・生徒と同居する保護者などへの依頼	5
(3) 教職員等（外部人材含む。）の健康管理 ◆.....	5
(4) 校内環境の適切な管理 ◆・・・・・・・・	6
(5) 清掃・消毒	7
(6) 連絡体制・衛生管理の徹底 ◆.....	9

2 教育活動の実施

(1) 教育活動を実施する上で必要な感染症対策	10
(2) 教育活動実施上の留意点 ◆.....	11
(3) 部活動	15
(4) 教育活動の実施に当たっての配慮事項 ◆.....	15
(5) 熱中症の防止	17
(6) 年間指導計画等の見直し	18

3 その他の留意点

(1) 登校の判断	19
(2) やむを得ず学校に登校できない児童・生徒に対する ICT の活用等による学習指導◆.....	20
(3) 保護者及び外部人材の来校に関する留意事項 ◆.....	20

II 臨時休業編

1 学校において感染者が発生した場合等の対応

(1) 感染者が判明した場合◆.....	22
(2) 感染の疑いがあると判明した場合◆.....	23

2 地域の感染状況を踏まえた対応

	23
--	----

<添付資料>

・学校運営に当たってのチェックリスト ◆.....	24
・感染防止対策チェックリスト（教室等）	25
・健康チェック表	26

～本ガイドラインについて～

本ガイドラインは、国及び東京都立学校における感染防止対策等を踏まえ、東大和市教育委員会として、感染症リスクを低減するための学校運営上取るべき指針を示すものです。

なお、本指針は、今後の状況等を踏まえながら、必要に応じて改訂・追加する場合がありますのでご留意下さい。

感染症対策に関する基本的な考え方

感染症対策においては、一人一人の感染予防に関する行動が、自分の命を、家族の命を、大切な人を、社会を守ることにつながる。また、感染症拡大防止のため、医療や社会生活を維持する業務の従事者等、最前線で尽力されている方々により、私たちの生活は成り立っている。学校教育活動の再開に当たっては、教職員、児童・生徒、その保護者、その他の学校関係者などの全員が、この認識を共有していくことが重要である。

そうした共通認識の下で、基本的な感染症対策に加えてソーシャルディスタンスなど、学校内外で「新しい日常」を徹底して実践することが必要である。そのため、学校内外において、以下五つの対策を徹底して講じる必要がある。

- (1) 以下の「3つの密（密閉・密集・密接）」を回避することを徹底
 - ・換気の悪い密閉空間
 - ・多くの人が密集している状況
 - ・互いに手を伸ばしたら届く距離での会話や共同行為※特に、「3つの密」が同時に重なる状況は必ず回避
- (2) 正しい手洗いや咳エチケットなどの基本的な感染症対策を徹底
- (3) 不要不急の外出行動を行わない・行わせないことを徹底
- (4) 日頃の連絡体制を確認し、確実に連絡が行き渡る体制づくりを徹底
- (5) 学校医や学校薬剤師等と連携した校内保健管理体制の整備の徹底

上記の対策のうち、一人一人が特に徹底すべき対策を「感染症基本行動3か条」として定め、徹底した対策を行うこととする。

なお、緊急事態宣言の発出等、今後の感染状況に応じて対応を変更する場合は、別途通知する。

「感染症基本行動3か条」

- ◆「3つの密」を徹底的に回避する。
- ◆正しいタイミングと正しい方法で手洗いをする。
- ◆咳エチケットを徹底する。

I 学校運営編

1 感染症予防対策の徹底

(1) 児童・生徒への指導

ア 新型コロナウイルス感染症についての理解

児童・生徒が新型コロナウイルス感染症の予防について正しく理解し、適切な行動をとれるよう、発達段階を踏まえた指導を行う。また、疾病に対する抵抗力を高めるため、家庭における十分な睡眠、適度な運動、バランスのとれた食事を心がけるよう指導すること。個人の基本的な感染予防対策は、**感染力が高いとされる変異株であっても、基本的な感染症対策は有効であり、学校での感染拡大を防止するためには、基本的な感染症対策の徹底、児童・生徒、教職員の健康観察の実施、保護者と連携した対策の推進が必要である。**

感染者や濃厚接触者とその家族に対する偏見や差別につながるような行為をしないこと、医療や社会生活を維持する業務の従事者、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために最前線で尽力されている方々に感謝の念をもつことについて、発達段階に応じた指導を行う。

また、ワクチンは最終的には個人の判断で接種されるものであることから、ワクチンの接種に当たっては、リスクとベネフィットを総合的に勘案し、児童・生徒及び保護者の意思で接種の判断を行うことが大切であること。加えて、身体的な理由や様々な理由によってワクチンを接種できない人や接種を望まない人もいること。また、その判断は尊重されるべきであることを踏まえた指導を行う。

※新型コロナウイルス感染症の予防に関わる指導資料（文部科学省）

https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/08060506_00001.htm

※新型コロナウイルス感染症に関する差別・偏見の防止に向けて（文部科学省）

https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00122.html

イ 「3つの密」の徹底した回避

密閉空間（換気の悪い密閉空間である）、密集場所（多くの人が密集している）、密接場面（互いに手を伸ばしたら届く距離での会話や共同行為が行われる）という三つの条件が同時に重なる場を避けるよう、指導をすること。「3つの密」が同時に重ならない場合でも、児童・生徒同士の間隔は、おおむね1～2mを目安に学級内で最大限の間隔を確保し、対面とならないよう対策を講じること。

ウ 正しいタイミングと正しい方法による手洗いの励行

以下を参考に、家庭及び学校における飛沫や接触による感染リスクが高まるタイミングでの手洗いについて、継続した指導を行う。手洗いは約30秒程度かけて、水と石けんで丁寧に洗う。学校で手洗いをさせる際には、トイレや手洗い場所が密集しないよう時間差での使用や、立ち位置を示すマーキングを行う等の対策を講じる。

家庭	帰宅時や食事の前後	トイレ使用后、 咳やくしゃみ・鼻を かんだ後
学校	登校時や給食前後、外で活動した後 体育の授業後、外遊びの後、 教材等を共用した後、清掃活動の後	

※接触感染防止のため、眼、鼻、口などをできるだけ触らないよう指導する。

※タオルやハンカチは共用せず、毎日交換したものを持参させ、清潔を保つよう指導する。

※手洗い場の数などで、正しいタイミングでの手洗いの励行が困難な場合でも、アルコールを含んだ手指消毒薬などを併用し、手指消毒の徹底に努めるよう指導する。

※上記の取組は、児童生徒のみならず、教職員や、学校に出入りする関係者の間でも徹底されるようにする。

※映像資料「感染症予防のための正しい手洗い方法」（東京都）

https://www.youtube.com/watch?v=lViN9C_BS-0

エ 咳エチケットの徹底

外出から帰宅まで、また登校から下校（食事や運動時、その他事情のある場合を除く。）まで、マスクを鼻と口を覆って着用させること。やむを得ない場合には、ティッシュ・ハンカチや袖で口・鼻を覆わせるなど、咳エチケットを保つよう指導すること。

オ マスクの着用

学校教育活動においては、児童・生徒及び教職員は、身体的距離が十分取れないときや換気が不十分と思われる場などでは原則としてマスクを着用すること。また、マスクの着用方法によって飛沫の捕集効果に違いが生じることから、正しい方法で着用することが重要である。さらに、一般的なマスクでは、不織布マスクが最も高い効果を持ち、次に布マスク、その次にウレタンマスクの順に効果があるとされていることを踏まえ、このことを保護者に適宜情報提供すること。（※）ただし次の場合には、マスクを着用する必要はない。

- ・十分な身体的距離が確保できる場合はマスクの着用は必要ない。
- ・気温・湿度や暑さ指数（WBGT）が高い日には、熱中症などの健康被害が発生するおそれがあるため、マスクを外す。熱中症も命の危険があることを踏まえ、熱中症への対応を優先させる。
 - マスクを外す場合は、できるだけ人との十分な距離を保つ、近距離での会話を控えるようにするなどの配慮をすることが望ましい。
 - 児童・生徒本人が暑さで苦しいと感じたときなどには、マスクを外したり、一時的に片耳だけかけて呼吸したりするなど、自身の判断でも適切に対応できるように指導する。
- ・体育の授業においては、マスクの着用は必要ない。

（※）新型コロナウイルスワクチンQ&A（一般の方向け）「マスクはどのような効果があるのでしょうか。」

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/dengue_fever_qa_00001.html#Q4-1

児童・生徒には、感染症対策用の持ち物として、一般的には次のものが必要となる。

「各自に必要な持ち物」

☆清潔なハンカチ・ティッシュ

☆マスク

☆マスクを置いたり、持ち運んだりするための布又はビニール袋

(参考) フェイスシールド・マウスシールドの活用について

フェイスシールドやマウスシールドは、マスクに比べ効果が弱いことに留意する必要がありますとされています。フェイスシールドはしていたが、マスクはしていなかった状況での感染が疑われる事例があったことなども踏まえ、感染症対策として、マスクなしでフェイスシールドやマウスシールドのみで学校内で過ごす場合には、距離をとるようにします。

例えば、教育活動の中で、顔の表情を見せたり、発音のための口の動きを見せたりすることが必要な場合には、フェイスシールドやマウスシールドを活用することも一つの方策と考えられますが、この場合には身体的距離をとりながら行います。

(2) 児童・生徒等と同居する保護者などへの依頼

ア (1)の内容を保護者にも通知等により確実に伝達するとともに、家庭においても対策を徹底していただくこと。

イ 児童・生徒が感染する場合、家庭内感染であることが多い状況にあり、児童・生徒と同様に家族も健康観察を実施していただくなど、家庭における感染症対策の徹底を依頼すること。

ウ 家庭で以下の事項について実施していただくよう依頼すること。

- ・毎朝の検温
- ・検温結果と健康状態について健康観察票に記載
- ・健康観察票において何らかの症状が見られる場合は登校を控え、無理をせず休養させる
(症状については主治医等に相談すること。)
- ・マスクの準備と着用

エ 校長は、児童・生徒が息苦しさ(呼吸困難)、強いだるさ(倦怠感)、高熱等の強い症状のいずれかがある場合、あるいは同居の家族に新型コロナウイルスに感染した者がいる場合、児童・生徒が濃厚接触者である旨を把握した場合には、速やかに学校に知らせよう、あらかじめ保護者に依頼すること。

オ 休日等における不要不急の外出を控える、友人同士の家庭間の行き来を控える、家族ぐるみの交流による接触を控えるなど、感染拡大防止に向けた細心の注意が必要であることについて、保護者の理解と協力を呼びかける。

(3) 教職員等(外部人材含む。)の健康管理

ア 教職員等は、児童・生徒と接することから、正しいタイミングと正しい方法による手洗い、咳エチケットの励行や健康管理等の感染症対策を一層徹底すること。

イ 教職員等は、毎朝自宅で検温を行い、風邪症状がないことを確認のうえ、出勤時に「健康チェック票」に体温等を記録すること。普段と体調が少しでも異なる場合には、自宅での休養を徹底すること。

ウ 校長は、毎日、教職員等の健康状態について問題がないことを確認し、3週間は記録を保管すること。

エ 職員室における勤務については、他者との間隔をおおむね1～2m確保できるようにし、会話の際は、できるだけ真正面を避けるようにする。会議等を行う場合は、換気をしつつ広い部屋で、最少の人数で行ったり、オンラインを活用したりするなど、開催方法を工夫する。

オ 机上の物が多いと高頻度接触面が多くなり、加えて、陽性者となった場合、対象者のデスクの周りの消毒が必要となるため、定期的に掃除し清潔な状態を保つ。

カ 電話や穴あけパンチ等の共有物は、複数の人が触るため、手指消毒剤を付近に設置し、都度手指消毒ができるようにする。

キ 勤務時間外においても、「3つの密」が想定される場所、特に「3つの密」が同時に重なる場所を避けること。家族、同居者等も同様に認識していただき、行動自粛について徹底すること。

(4) 校内環境の適切な管理

ア 昇降口付近や手洗い場、トイレ、教室など、校内の適切な場所に石けんや消毒用アルコールを含んだ手指消毒薬を設置し、手指の衛生を保てる環境を整備すること。

イ 換気を行うため、教室のドアは常時開放することとし、授業中における窓開けなどの換気は、可能であれば常時、困難な場合はこまめに(30分に1回以上、数分間程度、窓を全開する)、2方向の窓を同時に開けて行うこと。また、エアコンは室内の空気を循環しているのみで、室内の空気と外気の入れ替えを行っていないことから、エアコン使用時においても換気は必要である。

ウ 換気設備を設置している教室等では、常時、確実に換気設備を稼働させること。窓がない教室等では、送風機等により強制換気を行った上、常時送風機等を稼働させた状態で使用すること。

エ 上記の適切な換気を行いつつ、空調や衣服による温度調節などの校内環境管理の対策を講じること。

オ 冬期においても、気候上可能な限り、常時換気に努める。冬場の寒い場合には、10cmでも窓を開けると空気の流れができ換気ができる。難しい場合は30分に1回以上、少なくとも休み時間ごとに、窓を全開にすることに加え、以下の点に留意する。

・室温低下による健康被害の防止

室温低下による健康被害が生じないよう、児童・生徒に暖かい服装を心がけるよう指導し、学校内での保温・防寒目的の衣服の着用について柔軟に対応する。

また、室温が下がりすぎないよう、空き教室等人のいない部屋の窓を開け、廊下を経由して、少し暖まった状態の新鮮な空気を人のいる部屋に取り入れること(二段階換気)も、気温変化を抑えるのに有効である。

・機械による二酸化炭素濃度の計測

十分な換気ができているか確認するためには、換気の指標として、学校薬剤師等

の支援を得つつ、CO₂モニター等により二酸化炭素濃度を計測することが可能である。

カ 咳エチケットで出たごみ（鼻をかんだティッシュ等）を捨てる専用のごみ箱を用意し、何を捨てるごみ箱なのかごみ箱に明示する、蓋付き足踏み式のごみ箱を使用する、ごみ箱にポリ袋を重ねて使用する、中のごみの量は八分目までとするなど、必要な対応について児童・生徒及び教職員等の共通理解を図る。また、取っ手のあるごみ箱は、蓋を開けっ放しにしたり蓋を外したりする等の対応を行い、手で触る場所を減らすようにする。

キ 冷水器については、飲み口に口を近づけると呼気があたり、感染リスクが高くなるため、直接口をつけて飲まないよう、持参した水筒に水を入れるよう指導するか、冷水器を使用させないようにする。

（５）清掃・消毒

消毒は、感染源であるウイルスを死滅させ、減少させる効果はあるが、学校生活の中で消毒によりウイルスを死滅させることは困難である。このため、清掃による清潔な空間を保つこと及び健康的な生活により児童・生徒の免疫力を高め、手洗いを徹底することが重要である。

下記「ア 普段の清掃・消毒のポイント」を参考としつつ、通常の清掃活動の中にポイントを絞って消毒の効果を取り入れるようにする。

これらは、通常の清掃活動の一環として、新型コロナウイルス対策に効果がある家庭用洗剤等を用いて、発達段階に応じて児童・生徒が行っても差し支えないと考えられる。また、スクール・サポート・スタッフや地域学校協働本部による支援等、地域の協力を得て実施することも考えられる。

上記に加えて清掃活動とは別に、消毒作業を別途行うことは、感染者が発生した場合でなければ基本的には不要であるが、実施する場合には、極力、教員ではなく、外部人材の活用を行うことにより、各学校の教員の負担軽減を図ることが重要である。

学校長は、消毒によりウイルスを全て死滅させることは困難であることを踏まえ、手洗い・咳エチケット及び免疫力の向上という基本的な感染症対策を重視し、下記の「ア 普段の清掃・消毒のポイント」を参考としつつ過度な消毒とならないよう、十分な配慮が必要である。

ア 普段の清掃・消毒のポイント

- ・清掃用具の劣化や衛生状態及び適切な道具が揃っているかを確認するとともに、使用する家庭用洗剤や消毒液については新型コロナウイルスに対する有効性と使用方法を確認する。
- ・床は、通常の清掃活動の範囲で対応し、特別な消毒作業の必要はない。
- ・机、椅子についても、特別な消毒作業は必要ないが、衛生環境を良好に保つ観点から、清掃活動において、家庭用洗剤等を用いた拭き掃除を行うことも考えられる。
- ・大勢がよく手を触れる箇所（ドアノブ、手すり、スイッチなど）は１日に１回、水拭

きした後、消毒液を浸した布巾やペーパータオルで拭く。また、机、椅子と同様、清掃活動において、家庭用洗剤等を用いた拭き掃除を行うことでこれに代替することも可能である。

- ・教室には感染防止対策チェックリスト（添付資料「感染防止対策チェックリスト」参照）を設置し、消毒を行った日時を記録する。
- ・トイレや洗面所は、家庭用洗剤を用いて通常の清掃活動の範囲で清掃し、特別な消毒作業の必要はない。
- ・器具・用具や清掃道具など共用する物については、使用の都度消毒を行うのではなく、使用前後に手洗いをを行うよう指導する。
- ・管楽器などで唾液がつくような活動をする場合、教室内ですぐに手指消毒ができるようにアルコール消毒薬を近くに設置する。

イ 消毒の方法等について

- ・物の表面の消毒には、消毒用エタノール、家庭用洗剤（新型コロナウイルスに対する有効性が認められた界面活性剤を含むもの）0.05%の次亜塩素酸ナトリウム消毒液、一定の条件を満たした次亜塩素酸水を使用する。それぞれ、経済産業省や厚生労働省等が公表している資料等や製品の取扱説明書等をもとに、新型コロナウイルスに対する有効性や使用方法を確認して使用する。また、学校薬剤師と連携することも重要である。
- ・消毒薬等に記載されている使用期限に注意する。また、長期使用による消毒効果の減退を防ぐ必要がある（使用期限が記載されていない場合や交換頻度については、メーカーに確認する。）。
- ・人がいる環境に、消毒や除菌効果を謳う商品を空間噴霧して使用することは、眼、皮膚への付着や吸入による健康影響のおそれがあることから推奨されていない。（「新型コロナウイルスの消毒・除菌方法について」（厚生労働省・経済産業省・消費者庁特設ページ）より引用）
- ・消毒作業中に、目、鼻、口、傷口などを触らないようにする。
- ・換気を十分に行う。

（【別添 11】令和 2 年 6 月 4 日付事務連絡「学校における消毒の方法等について」（文部科学省初等・中等教育局健康教育・食育課）【別添 13】「ご家庭にある洗剤を使って身近な物の消毒をしましょう」（経済産業省・独立行政法人 製品評価技術基盤機構）【別添 14】「次亜塩素酸水」を使ってモノのウイルス対策をする場合の注意事項（厚生労働省・経済産業省・消費者庁）参照）

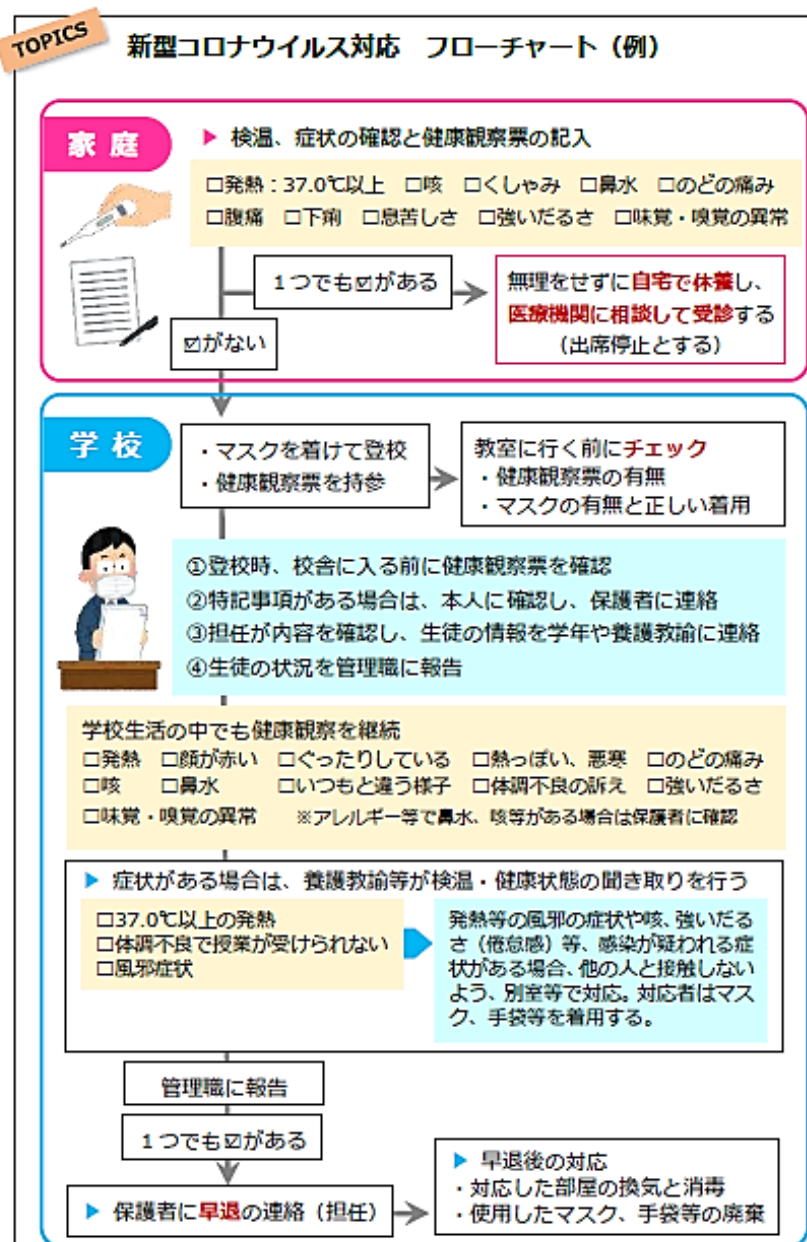
ウ 感染者が発生した場合の消毒について

- ・児童・生徒や教職員の感染が判明した場合には、保健所及び学校薬剤師等と連携して消毒を行うが、必ずしも専門業者を入れて施設全体を行う必要はなく、当該感染者が活動した範囲を特定して汚染が想定される物品（当該感染者が高頻度で触った物品）を消毒用エタノールまたは 0.05%の次亜塩素酸ナトリウム消毒液により消毒する。
- ・感染症が疑われる児童・生徒等が一時的に休養する場合は、拭き取り消毒が可能なビニール製の椅子等に休ませることで、拭き取り消毒が可能となる。
- ・症状のない濃厚接触者が触った物品に対する消毒は不要とされている。

- ・物の表面についたウイルスの生存期間は、付着した物の種類によって異なるが、24時間～72時間くらいと言われており、消毒できていない箇所は生存期間を考慮して立ち入り禁止とするなどの処置も考えられる。
- ・消毒は「(参考)消毒の方法及び主な留意事項について」を参考に行う。尚、トイレについては、消毒用エタノールまたは0.1%の次亜塩素酸ナトリウム消毒液を使用して消毒する。

(6) 連絡体制・衛生管理の徹底

- ア 保護者と日中に必ず連絡が取れるよう、連絡先を確認し、家庭との連絡体制を整備すること。
- イ 学校医や学校薬剤師との連携の下で、個別の学校の施設の状況等に応じた必要な消毒対策を実施する等、徹底した衛生環境の整備に努めること。



(参考) 消毒の方法及び主な留意事項について

	消毒用エタノール	一部の界面活性剤	次亜塩素酸ナトリウム消毒液	次亜塩素酸水
使用方法	<ul style="list-style-type: none"> ・消毒液を浸した付近やペーパータオルで拭いた後、そのまま乾燥させる 	【住宅・家具用洗剤】 <ul style="list-style-type: none"> ・製品に記載された使用方法どおりに使用 【台所用洗剤】 <ul style="list-style-type: none"> ・布巾やペーパータオルに、洗剤を薄めた溶液をしみこませ、液が垂れないように絞って使う。拭いた後は、清潔な布等で水拭きし、最後に乾拭きする 	<ul style="list-style-type: none"> ・0.05%の消毒液を浸した布巾やペーパータオルで拭いた後は、必ず清潔な布等で水拭きし、乾燥させる(材質によっては変色や腐食をおこす場合があるため) ・感染者が発生した場合のトイレでは0.1%の消毒液を使用 	【拭き掃除】 <ul style="list-style-type: none"> ・製品に、使用方法、有効成分(有効塩素濃度)、酸性度(pH)、使用期限の表示があることを確認 ・有効塩素濃度80ppm以上のものを使用 ・汚れをあらかじめ落としておく(元の汚れがひどい場合などは、有効塩素濃度200ppm以上のものを使うことが望ましい) ・十分な量の次亜塩素酸水で表面をヒタヒタに濡らす ・20秒以上時間をおき、きれいな布やペーパータオルで拭き取る
	消毒作業中に、目、鼻、口、傷口などを触らないようにする			
主な留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・引火性があるので電気スイッチ等への噴霧は避ける ・換気を十分に行う 	<ul style="list-style-type: none"> ・パンフレット「ご家庭にある洗剤を使って身近な物の消毒しましょう」参照(別添資料14) 	<ul style="list-style-type: none"> ・必ず手袋を使用(ラテックスアレルギーに注意) ・色落ちしやすいもの、腐食のおそれのある金属には使用不可 ・希釈した次亜塩素酸ナトリウムは使い切りとし、長時間にわたる創り置きはしない ・換気を十分に行う ・噴霧は絶対にしない ・児童生徒には扱わない 	<ul style="list-style-type: none"> ・パンフレット『次亜塩素酸水』を使ってモノのウイルス対策をする場合の注意事項」参照(別添資料15)

※効果が確認された界面活性剤を含む洗剤を使用する場合は、以下の情報を参考にする。

【別添11】令和2年6月4日付事務連絡「学校における消毒の方法等について」(文部科学省初等・中等教育局健康教育・食育課)より

独立行政法人製品評価技術基盤機構(NITE)のホームページ

(<https://www.nite.go.jp/infomation/osirasedetergentlist.html> において随時更新)

2 教育活動の実施

(1) 教育活動を実施する上で必要な感染症対策

「1 感染症予防策の徹底」に示した基本的な感染症予防策を継続して実施するとともに、在校時間全般にわたって児童・生徒の健康状態に注意を払い、必要に応じて検温するなど、健康観察を丁寧に行うこと。また、以下の事項に留意すること。

ア 登校時の健康状態の把握

学校は、児童・生徒等に対して、毎朝、自宅で検温するよう指示し、健康観察票等

を提出させる等、児童・生徒の健康状態を登校時点で確認すること。

なお、家族内に感染を疑われる者がいる場合や、児童・生徒に発熱等の風邪の症状や腹痛・下痢などの胃腸炎が見られる場合は、原則として自宅で休養するよう指導すること。

登校時に健康観察票等により健康状態を確認できなかった、また健康観察票で体温が37度以上の記載のあった児童・生徒については、直ちに別室で検温するとともに、風邪の症状などを確認すること。

イ 児童・生徒が体調不良を訴えた場合への準備

校長は、感染症が疑われる児童・生徒の発生時における校内の連絡協力体制をあらかじめ決めておく。

ウ 児童・生徒が体調不良を訴えた場合の対応

●感染症が疑われる児童・生徒は別室で対応し、感染拡大防止のため、対応に当たる教職員等を限定する。対応に当たる教職員等は、自身や当該児童・生徒が正しくマスクを着用しているかを確認し、当該児童・生徒とともに手洗いした上で、別室へ移動する。また、他の児童・生徒と寝具やタオル等を共用しないようにする。対応後も、教職員等は手洗いを徹底する。

●体液に触れる処置が必要な場合は、必要な感染予防策(ゴム手袋やフェイスシールド等)をとって対応し、前後の手洗いを徹底する。

●登校時や登校後に風邪症状がみられた場合には、速やかに当該児童・生徒の保護者に連絡した上で安全に帰宅させ、症状がなくなるまで自宅で休養するよう指導すること。下校方法については保護者と相談する。また、下校するまでに定期的に健康状態を確認する。また、発熱等の風症状がある場合には、かかりつけ医等の身近な医療機関に直接電話相談し、医療機関を受診するよう促すこと。

※家庭内でご注意いただきたいこと～8つのポイント～(厚生労働省)

<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000601721.pdf>

●下校後は、当該児童・生徒が手を触れたと思われる箇所を消毒するとともに、部屋の換気を十分行う。

●同居の家族に発熱や倦怠感、喉の違和感などの風邪症状がある場合にも登校を控えるようにすること。

(2) 教育活動実施上の留意点

【基本的な考え方】

- ・児童・生徒一人一人が新型コロナウイルス感染症に関する正しい知識を身に付けるとともに、自ら判断し、感染を防ぐ行動をとることができるよう、発達段階に応じた指導を行う。
- ・知・徳・体をバランスよく組み合わせた教育活動を実施する。
- ・学校におけるデジタルを活用した学習の充実に取り組むとともに、登校による学習とオンライン学習等による家庭学習を組み合わせる実施する。

ア 感染症対策に留意した各教科等の指導

- 教科等の指導に当たっては、教員及び児童・生徒は、マスクの着用を基本とし、飛沫感染の防止に努める。
- 児童・生徒同士の間隔をおおむね1～2m確保できるよう、教室の割り当てや座席の配置等（対面とならないようにするなど）に留意する。
- 実技や実験等で使用する楽器や用具等は、使用前後に手洗いをを行うよう指導する。
- 感染症対策を講じてもなお飛沫感染の可能性が高い活動については、リスクの低い活動から、可能な限り感染症対策を行った上で、「密集」「密接」を避け、リスクの低い活動から実施することを検討する。

【各教科等における「感染症対策を講じてもなお感染のリスクが高い学習活動」】

（「★」は特にリスクの高いもの）

- ・各教科に共通する活動として、「児童・生徒が長時間、近距離で対面形式となるグループワーク等」及び「近距離で一斉に大きな声で話す活動」（★）
 - ・理科における「児童・生徒同士が近距離で活動する実験や観察」
 - ・音楽における「室内で児童・生徒が近距離で行う合唱及びリコーダーや鍵盤ハーモニカ等の管楽器演奏」（★）
 - ・図画工作、美術における「児童・生徒同士が近距離で活動する共同制作等の表現や鑑賞の活動」
 - ・家庭、技術・家庭における「児童・生徒同士が近距離で活動する調理実習」（★）
 - ・体育、保健体育における「児童・生徒が密集する運動」（★）や「近距離で組み合ったり接触したりする運動」（★）
- グループや少人数による話し合い活動は、一定の距離を保ち、回数や時間を絞るなどの工夫を行った上で、グループの人数に配慮して実施する。その他「密集」「密接」にならない意見交換の方法を積極的に活用する。
 - 理科の学習は、児童・生徒が対面で着席をしたり、顔を寄せ合ったりすることのないよう、グループの人数や座席配置を工夫する。実験は、密接を防ぐため、1セットの実験器具を扱う人数を制限するなどして実施する。また、実施の際は、理科教室等の換気扇を常時使用するとともに、可能な限り窓を開けるなどの換気を行う。
 - 調理実習を実施する場合は、衛生管理を徹底するとともに、密接を防ぐため、1台の調理器具を扱う人数を制限するなどして実施する。実習で使用する調理器具等は、児童・生徒間での使い回しを極力避け、共用する場合には使用前後の手洗いを徹底する。また、児童・生徒が対面で着席したり、顔を寄せ合ったりすることのないよう、グループの人数や座席配置を工夫する。

イ 音楽の授業等を実施する場合の注意事項

- 歌唱の活動や管楽器（リコーダー等）を用いる活動は、音楽室等の換気を十分に行い、活動する児童・生徒の前に他の児童・生徒が位置しないよう、窓や壁に向かって、前後方向及び左右方向ともにできるだけ2m（最低1m）間隔を空けた横1列の隊形や半円の隊形で実施する等の工夫を行う。

- 管楽器の演奏以外の時間はマスクの着用を基本とする。

※なお、ここでのいうマスクは、厚生労働省「新型コロナウイルス感染症の予防」啓発資料による正しいマスクの着用（鼻と口の両方を隙間がないよう覆った）に則った形状のものをよぶ。マウスシールド、下部の開放が広いマスクなど、隙間のある形状のものは該当しない。フェイスシールドについては的確な取り扱いを行わないと感染を拡大させてしまう危険があり、専門的知識のない方が扱うことは危険であるので、合唱活動においての着用は推奨しない。

- 合唱を行う場合には、特に以下の感染症対策にも取り組む。

- ・合唱している児童・生徒同士の間隔や、指導者・伴奏者と児童・生徒との間隔、発表者と聞いている児童・生徒等との間隔は、マスクを着用している場合であっても、前後方向及び左右方向ともにできるだけ2 m（最低1 m）空ける。
- ・立っている児童・生徒の飛沫が、座っている児童・生徒の顔へ付着する飛沫感染のリスクを避けるため、立っている児童・生徒と座っている児童・生徒が混在しないようにする。
- ・連続した合唱の練習時間はできる限り短くする。常時換気を原則とし、窓等を対角方向に開け、十分に換気を行う。飛沫感染に留意し、近距離での大声を徹底的に避ける。
- ・屋外で、十分な距離（最低2 m）を確保して、向かい合わずに合唱を行う場合には、マスクを着用せずに行うことも考えられる。屋外に準じる程度に十分に換気の行き届いた空間（双方向の窓を全開している場合や、換気設備が整っている場合等）においても、同様とする。

ウ 実技を伴う体育の授業を実施する場合の注意事項

- 熱中症に留意するとともに、児童・生徒の休業中の体力の低下や健康状況を考慮して実施する。

- 可能な限り屋外で実施する。体育館等で実施する場合は十分な換気を行う。

- 体育館や武道棟の入口にアルコール消毒薬を設置し、手指消毒を徹底する。

●体育の授業におけるマスクの着用については必要ない。【別添1】令和2年5月21日付「学校の体育の授業におけるマスク着用の必要性について」を踏まえて対応する。ただし、教員の説明を聞いているときなど、運動していない場面においては可能な限りマスクを着用する。また、気温・湿度や暑さ指数（WBGT）が高くない日に、呼吸が激しくならない軽度な運動を行う際、児童・生徒がマスクの着用を希望する場合は、マスクの着用を否定するものではないが、その際であっても、児童・生徒の体調の変化に注意すること。

- 更衣室は、定期的に換気するとともに、児童・生徒を小グループに分けて短時間で利用することとし、密集した状態にならないようにする。

- 用具等の使用前後に、手洗いをを行うよう指導する。

- 水泳については、【別添2】令和3年4月9日付事務連絡「学校の水泳授業における感染症対策について」を参照し、適切な感染症対策を行った上で実施する。

- 柔道での攻防、器械運動での補助など、飛沫感染の可能性が高く、常時、身体接触

を伴う活動において、可能な限りの感染症対策を講じても児童・生徒の安全を確保することができないと判断する場合は、実施を控える。

- 医療的ケア児及び基礎疾患児の場合や、保護者からの感染の不安により授業への参加を控えたい旨の相談があった場合等は、授業への参加を強制せずに、児童・生徒や保護者の意向を尊重すること。

エ 体育館等における全体指導等

参加者は対象学年の児童・生徒のみとし、児童・生徒同士の間隔をおおむね1～2m確保し、2方向のドアや窓を開けるなど、十分な換気を行う。内容を精選し、全体の時間が長くないよう配慮する。

オ 学校図書館

学校図書館は、児童・生徒の読書の拠点として、また学習・情報の拠点として、学校教育における重要な機能を果たしている。図書館利用前後には手洗いをするというルールを徹底し、また児童・生徒の利用する時間帯が分散するよう工夫して図書館内での密集を生じさせない配慮をした上で、貸し出し機能は維持するよう取り組む。

※公益社団法人日本図書館協会「図書館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」

<http://www.jla.or.jp/Portals/0/data/content/information/corona0526.pdf>

カ 給食指導

- 配膳・下膳の際は、密集を避けるよう指導する。例えば、児童・生徒等が間隔をあけて並ぶために立ち位置をマーキングするなどして、密集を避けて配膳を行う。
- 飲食の場面では感染リスクが高まるとされていることから、十分な換気を行うこと。
- 喫食の場所の密集を避けるとともに、会食に当たっては、飛沫を飛ばさないよう、例えば、机を向かい合わせにしない等、児童・生徒が対面して喫食する形態を避け、大声での会話を控えるなどの対応が必要である。
- 配膳の際は、マスクの着用、前後の手洗いなど、衛生管理を徹底させる。
- 喫食の前後には、児童・生徒全員の手洗いを徹底させる。
- 喫食の際は、着用していたマスクを布又はビニール袋等に入れて適切に保管するよう指導する。
- 回し飲みは接触感染のリスクがあるため行わない。

キ 休憩時間

- 教室等の窓を開け、換気を徹底する。
- 児童・生徒が互いの間隔を適切にとるとともに、休憩時間終了後等に手洗いを徹底するよう指導する。
- 事前指導や注意喚起を徹底するとともに、必要に応じて教職員等が休憩時間中の見守りや指導を行う。

ク 清掃活動

2方向の窓やドアを開けるなど十分な換気を行った上で、マスクを着用して行い、活動の前後は必ず流水と石けん等を使用して手洗いをを行うよう指導する。

ケ 児童・生徒への注意喚起

次の注意事項について、学級指導等を通じて周知するとともに、適宜、放送等を通じた注意喚起を実施する。

- ・マスクの着用、手洗いの励行
- ・「3密」を避けた行動
- ・教室等の換気
- ・下校後や登校しない日の不要不急の外出を避けること。

(3) 部活動

可能な限りの感染症対策を行った上で、リスクの高い活動等については、真に必要な活動かどうかを慎重に判断すること。

その際、部活動に付随する場面での対策の徹底も図りつつ、顧問の教師や部活動指導員等に委ねるのではなく、学校の管理職が顧問等から活動計画書等を提出させ、内容を確認して実施の可否を判断するなど、責任をもって一層の感染症対策に取り組むこと。

なお、部活動を実施するに当たっては、次の点に留意し、感染症予防策を徹底した上で、「東大和市教育委員会学校部活動の在り方に関する方針」及び各学校の活動方針に基づき実施するものとする。

併せて、各団体で作成しているガイドラインを参考に取り組を進める。

ア 留意点

- 運動不足の生徒もいると考えられるため、生徒の怪我防止には十分に留意すること。
また、生徒に発熱等の風邪の症状が見られる時は、部活動への参加を見合わせ、自宅で休養するよう指導すること。
- 生徒の健康・安全の確保のため、生徒だけに任せるのではなく、教員や部活動指導員等が活動状況を確認すること。
- 活動時間や休養日については、「東大和市教育委員会 学校部活動の在り方に関する方針」に準拠するとともに、実施内容に十分留意すること。
- 活動場所については、可能な限り屋外で実施することが望ましいこと。ただし気温が高い日などは、熱中症に注意すること。体育館など屋内で実施する必要がある場合は、こまめな換気や、手洗い、消毒液の使用(消毒液の設置、生徒が手を触れる箇所の消毒)を徹底すること。また、長時間の利用を避け、十分な身体的距離を確保できる少人数による利用とすること。特に、屋内において多数の生徒が集まり呼気が激しくなるような運動や大声をだすような活動は絶対に避けること。
- 用具等については、生徒間で不必要に使い回しをしないこと。
- 更衣室や部室は、定期的に換気するとともに、生徒を小グループに分けて短時間で利用することとし、密集した状態とならないよう工夫する。
- 運動部活動の実施に当たっては、体育の授業における留意事項(p. 10、11)を踏まえること。
- 部活動の日時や実施内容をあらかじめ生徒・保護者に周知し、理解を得た上で実施

する。

- 生徒の体力や健康及び技能等の状況を踏まえるとともに、生徒の安全を確保するため、適宜、活動日・活動時間・活動内容等の見直しを行う。

イ 対外試合や大会参加等について

- 対外試合や合同練習については、生徒一人一人の体力や健康及び技能等を身に付けるための十分な期間を経た上で実施する。
- 対外試合・合同練習の実施や大会参加などの校外での活動については、各部活動の意義や目的に照らし、その必要性について慎重に判断する。
- 対外試合・合同練習の実施や大会参加をする場合は、必ず生徒・保護者の同意を得ること。また、学校として責任をもって、会場への移動時や会場での更衣室及び会議室の利用時など、大会におけるスポーツ・文化活動以外の場面も含め感染症対策を講じる。

※このほか、文部科学省作成のQ&Aで示している内容に留意すること。

https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00025.html

(4) 教育活動の実施に当たっての配慮事項

ア 児童・生徒の心身の状況の把握と心のケア等

(ア) 支援が必要な児童・生徒の早期発見・早期対応に向けた取組

自分も感染するのではないかという恐れや、自宅待機等による、学習についていけるかという焦りなど、コロナ禍で、今後の見通しがもちづらい状況下において、児童・生徒が漠然とした不安や深刻な悩みを一人で抱え込んでしまう心配があるということについて、全教職員で共通理解を図った上で、年間を通して丁寧な心のケアを行う。必要に応じて ICT の活用も図りつつ、学級担任や養護教諭等を中心としたきめ細かな健康観察や健康相談の実施等により、児童・生徒の状況を的確に把握し、スクールカウンセラー等による面接等の支援を行うなど、心のケアに適切に取り組むこと。

特に、成績の低下、うつ病等の様々な精神疾患の疑い、家庭環境の変化等、自殺の危険因子となる状況がないか留意するとともに、児童・生徒等に自殺を企図する兆候が見られた場合には、特定の教職員で抱え込まず、保護者、医療機関等と連携しながら組織的に対応すること。また、24 時間子どもダイヤルや SNS 相談窓口等の相談窓口を適宜周知すること。

(イ) 学校・家庭・地域の連携による「子どもが安心して相談できる環境」の構築

全ての児童・生徒に、どんなに小さなことでも心配なことがある場合は、身近にいる信頼できる大人や、相談機関に相談するよう、校長講話や学級指導、【別添 3】「相談窓口一覧」の配付時等の機会を捉えて、折に触れて伝える。特に、中学生に対しては「相談ほっと LINE@東京」等、SNS による教育相談も活用できることを重ねて周知する。

さらに、学校便りや学校ホームページ等により、保護者や地域に対して、家庭における児童・生徒の見守りについて依頼するとともに、児童・生徒に少しでも気になる

様子が見られる場合は、学校や相談機関に相談するよう周知する。

イ 感染者、濃厚接触者等に対する偏見や差別の防止

感染者、濃厚接触者とその家族等に対する偏見や差別につながるような行為をしないこと、医療や社会生活を維持する業務の従事者等、新型コロナウイルス感染拡大防止のために最前線で尽力されている方々に感謝の念をもつことについて、新型コロナウイルス感染症に関する適切な知識を基に、発達の段階に応じた指導を行う。

また、ワクチンは最終的には個人の判断で接種されるものであることから、ワクチンの接種に当たっては、リスクとベネフィットを総合的に勘案し、児童・生徒及び保護者の意思で接種の判断を行うことが大切であること。加えて、身体的な理由や様々な理由によってワクチンを接種できない人や接種を望まない人もいること。また、その判断は尊重されるべきであることを踏まえた指導を行う。

- 新型コロナウイルス感染症に起因するいじめ等の防止の観点から、【別添4】令和2年4月16日付2初健食第3号「新型コロナウイルス感染症の感染者等に対する偏見や差別の防止等の徹底について」及び【別添5】令和2年6月2日付大教学指収第291号「学校の教育活動再開後及び別添5令和2年度の健全育成に係る取組について（通知）」を参考に、発達の段階に応じた指導を定期的に行う。その際、例えば、マスクをしていない、咳をしている、登校時における検温で熱がある、医師の指示等により出席を控えているなどの児童・生徒へのいじめや偏見、差別が生じないように、生活指導上の配慮等を十分に行う。
- 「人権教育プログラム（学校教育編）令和3年3月」の「人権尊重の精神を育むための指導法の工夫」（p.91）に掲載されている参考資料や実践事例等を活用し、発達段階に応じた指導を定期的に行う。その際、例えば、マスクをしていない、咳をしている、登校時における検温で熱がある、医師の指示等により出席を控えているなどの児童・生徒へのいじめや偏見、差別が生じないように、生活指導上の配慮等を十分に行う。
- 【別添6】「新型コロナウイルス感染症に関連する偏見や差別意識の解消を図る指導資料」（東京都教職員研修センター）等を活用して、新型コロナウイルス感染症に関する偏見や差別、いじめを防止し、医療従事者等への感謝の念を育む指導を継続的に行う。
- 児童・生徒や保護者等が、新型コロナウイルス感染症を理由としたいじめや偏見等に悩んだ場合には、学校や相談窓口（いじめ相談ホットライン、SNS教育相談等）に相談するよう、適宜周知する。

【参考】

新型コロナウイルス感染症に関する偏見や差別意識の解消を図る指導資料です。

- ◆令和2年6月3日付2教セ開第47号「新型コロナウイルス感染症に関連する偏見や差別意識の解消を図る指導資料の配布について(通知)」(東京都教職員研修センター)

新型コロナウイルス感染症に関連するいじめ等について考える漫画形式・アプリ教材を都教育委員会ホームページに掲載しています。授業や家庭学習における活用を通して、児童・生徒が、新型コロナウイルス感染症に関連するいじめ等を受けたときや、見たり聞いたりしたときなどに、どのように対処すればよいかを考えるとともに、相談することの大切さについて理解できるようにしています。

- ◆漫画形式教材「相手の今を思うと...」(日本語版、英語版、中国語版、韓国語版)

身近な人が新型コロナウイルスに感染した際、どのようにしたらよいかを考える生徒の話

- ◆漫画形式教材「まるでウイルスみたいに...」(日本語版、英語版)

新型コロナウイルス感染症に関連するいじめや偏見、差別によって苦しむ生徒の話
(東京都教育庁指導部指導企画課)

新型コロナウイルス感染症に関連する偏見や差別を防ぐため、改めて学校における発達の段階に応じた指導を確実に行う際の参考資料、児童・生徒や保護者等が新型コロナウイルス感染症に関連したいじめ、偏見や差別に悩んだ場合の相談窓口を紹介しています。

- ◆令和3年4月9日付3教指企第90号「新型コロナウイルス感染症の感染者等に対する差別や偏見の防止について(通知)」(東京都教育庁指導部指導企画課)

(5) 熱中症の防止

気候の状況に応じて、【別添7】令和3年5月14日付事務連絡「熱中症事故の防止について(通知)」及び【別添8】令和2年5月11日付3教指企第245号「熱中症事故の防止について(通知)」を踏まえ、下記事項に十分留意して事故防止の徹底を図る。

- 熱中症は、未然に防止できることや、児童・生徒の健康や生命に甚大な影響を与えることを、学校全体及び指導者が十分に認識した上で指導に当たる。
- 児童・生徒の健康管理を適切に行い、一人一人の状況に応じて必要な対策を個別に講じる。
- 部活動をはじめとする教育活動全般において、天候・気温、活動内容・場所等の状況により、延期又は中止等の柔軟な対応を検討する。
- 活動する場合においては、環境条件を考慮して、活動量・内容・時間・場所等を変更するなど熱中症予防対策を徹底するとともに、水分・塩分の補給や休憩を励行し、適切に対策を講じる。また、熱中症の疑いがある症状が見られた場合には、

早期に水分・塩分補給、体温の冷却、病院への搬送等適切な処置を行う

- 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、児童・生徒及び教職員は、基本的には常時マスクを着用することが適切である。ただし、気候の状況等により、熱中症などの健康被害が発生する可能性が高いと判断した場合は、換気や児童・生徒の間に十分な距離を保つなどの配慮の上、マスクを外すよう対応する。
- 登下校時など屋外で一定の距離が確保できれば、マスクを外すなどの指導の工夫をすること。

(6) 年間指導計画等の見直し

ア 基本的な考え方

- 年間指導計画を見直す際には、授業等の質的な改善を図るとともに、学習指導要領に示された教科の内容や総合的な学習の時間の学習、外国語活動、道徳科、特別活動をバランスよく指導する計画を立てる。
- 週休日や祝日、長期休業期間を活用する場合は、児童・生徒及び教職員の疲労の度合い等、過重負担とならないよう考慮して設定するとともに、保護者に丁寧な説明する。また、週休日や祝日に授業を行う場合には、勤務した教員について適切に勤務の振替を行う。

イ 学校行事等

学校行事等の実施に当たっては、各学校の教育目標等の実現を図ることを基本とし、学校や地域の感染状況を踏まえて3つの密（密閉、密集、密接）とならないよう、実施内容や方法を工夫した上で実施する。

- 準備期間を含め、密集・密接を避けて実施することが困難である場合には、中止や実施内容の縮小、代替行事の実施等の対策を講じる。
- 「3密」と「大声」を徹底的に避けた計画とするとともに、30分に1回を目安として定期的に休憩を挟み、その都度、会場内の換気を行うなどの工夫を行う。また、オンラインによる鑑賞も積極的に活用する。
- 全校・学年等の児童・生徒が一堂に会さないように分散させるなど、実施方法を工夫する。
- 校外における活動については、事前の実地踏査等において、往復の経路及び目的地及び見学先における感染症対策について十分確認を行うとともに、必要に応じて、見学先等と十分な協議を行う。また、事前に提出する校外学習届に確認内容等を記載する。
- 宿泊を伴う行事については、参加児童・生徒の保護者に対して事前に感染症対策等についての丁寧な説明を行った上で、参加承諾書を得る。
- 延期又は中止の判断は、キャンセル料が発生する前に行う。

ウ 健康診断の実施

- 実施方法等について、学校医・学校歯科医・関係機関等に十分に相談し、実施すること。その際、以下の点に注意する。

- ・会場は十分換気する。
 - ・会場には一度に多くの人数を入れない。
 - ・整列させる際には1～2mの間隔を空け、密集しないようにする。
 - ・健康診断の前後の手洗い、咳エチケットを徹底する。
 - ・会場では会話や発声を控える。
- 結核検診や心臓検診については、可能な範囲で先行して実施する。
 - 検査に必要な器具を適切に消毒する。

3 その他の留意点

(1) 登校の判断

ア 医療的ケアが日常的に必要な児童・生徒について

- 医療的ケアが日常的に必要な児童・生徒（以下医療的ケア児という。）が在籍する学校においては、地域の感染状況を踏まえ、主治医や学校医・医療的ケア指導医に相談の上、医療的ケア児の状態等に基づき個別に登校の判断をする。
- 基礎疾患等があることにより重症化するリスクが高い児童・生徒についても、地域の感染状況を踏まえ、主治医や学校医に相談の上、個別に登校の判断をする。
- 登校すべきでないと判断した場合、出欠の扱いは「非常変災等児童・生徒又は保護者の責任に帰すことができない事由で欠席した場合などで校長が出席しなくてもよいと認めた日」として扱う。指導要録上も「欠席日数」とはせず、「出席停止・忌引等の日数」として記録を行う。

イ 海外から帰国した児童・生徒について

- 国や地域を問わず、留学等から帰国した児童・生徒については、帰国後2週間は本人又は保護者との連絡を密にするとともに検疫所等からの要請内容を確認し、要請に従うよう指導する。留学先によっては、日本に帰国した後、検疫所長の指定する場所等で実施したPCR検査結果が判明するまでの待機や、公共交通機関の使用自粛要請等もあり得る。
- これらの場合の出欠の扱いは「学校保健安全法第19条による出席停止」又は「非常変災等児童・生徒又は保護者の責任に帰すことができない事由で欠席した場合などで校長が出席しなくてもよいと認めた日」として扱う。指導要録上も「欠席日数」とはせず、「出席停止・忌引等の日数」として記録を行う。

ウ 感染症の予防上、保護者が児童・生徒を出席させなかった場合について

- 新型コロナウイルス感染症の流行に対して、感染を予防するために、保護者が児童・生徒を出席させなかった場合には、登校できない児童・生徒等に連絡を取り、健康状態や学習状況を把握するとともに、オンラインを活用するなどして学校の学習内容や課題を伝えるなど個別に対応を行う。
- この場合の出欠の扱いについては、校長が出席しなくてもよいと認める日として扱うことができる。その際、指導要録上の取扱いは「欠席日数」とはせず、「出席停止・忌引等の日数」として記録する。

(2) やむを得ず学校に登校できない児童・生徒に対する ICT の活用等による学習指導

ア 臨時休業や出席停止により、やむを得ず学校に登校できない児童・生徒に対しては、学習に著しい遅れが生じることのないようにするとともに、規則正しい生活習慣を維持し、学校と児童・生徒との関係を維持することが重要である。

イ 感染の状況に応じて、地域や学校、児童・生徒の実情等を踏まえながら、学校において必要な措置を講じること。特に、一定の期間児童・生徒がやむを得ず学校に登校できない場合などは、Teams の会議システムを活用するなどして、指導計画等を踏まえた教師による学習指導と学習状況の把握を行うことが重要であること。

ウ 学習指導を行う際には、主たる教材である教科書に基づいて指導するとともに、教科書と併用できる教材等（例えばデジタル（SKYMENU CLOUD 等）又はアナログ（ドリル等）の教材、オンデマンド動画、テレビ放送等）を組み合わせたり、ICT 環境を活用したりして指導することが重要であること。また、課題を配信する際には児童・生徒の発達の段階や学習の状況を踏まえ、適切な内容や量となるよう配慮すること。

(3) 保護者及び外部人材の来校に関する留意事項

ア 保護者等の参観等については、児童・生徒を含むすべての参加者について、他者との間隔をおおむね 1～2 m 確保できるようにし、対面とにならないよう対策を講じる。また、分散による参観等、来校時や参観時等における 3 密を避ける工夫をする。

イ 保護者等の来校に際しては、来校者の検温及び手指消毒を確実に行うようにすること。

ウ 保護者会等の実施に当たっては、他者との間隔をおおむね 1～2 m 確保できるようにし、対面とにならない座席配置等の対策を講じるとともに、資料を事前配布する等、短時間での開催ができるよう対策を講じる。また、開催日程の分散等、来校時の 3 密を避ける工夫を併せて行う。

Ⅱ 臨時休業編

新型コロナウイルス感染症は、当分の間、常に再流行のリスクが存在する。引き続き流行への警戒を継続し、地域における感染者が増加した場合に備えて流行への監視体制を強化するとともに、その場合の学校における対応について【別添 9】令和 3 年 8 月 27 日事務連絡「学校で児童生徒等や教職員の新型コロナウイルスの感染が確認された場合の対応ガイドラインの送付について」を参照し、想定・準備を進めておくことが重要である。

また、感染者及びその家族等やワクチン接種の有無に関する差別・偏見・誹謗中傷などはあってはならないことであり、これらが生じないよう十分に注意を払うことが必要である。万が一これらの行為が見られた場合には、加害者に人権尊重の視点に立った指導を行うとともに、その被害者に対して十分なサポートを行う必要がある。

1 学校において感染者が発生した場合等の対応

学校において感染者等が発生した場合には、【別添 10】「児童・生徒及び教職員等が新型

コロナウイルスに感染した場合等の対応について」を参照するとともに、学校医や保健所等と連携して速やかに対応し、学校での集団発生を防いでいく。

(1) 感染者が判明した場合

ア 校長は、児童・生徒や教職員等、学校関係者が感染したと判明した場合は、

【別添 12】「新型コロナウイルス感染症に関する教育委員会への報告事項」により、症状の有無や経過、学校内における活動の態様、接触者の多寡、感染経路の明否等について、本人等に確認を行う。感染者が児童・生徒の場合、学校保健安全法（以下、法という。）第 19 条に基づき出席停止の措置を、教職員等の場合、病気休暇の措置を、それ以外の学校関係者の場合、校内への立ち入り禁止の措置を行う。出席停止の期間は治癒するまでの間とし、治癒は医療機関ないし保健所の判断に基づく。

感染者	措置	期間
児童・生徒	出席停止	治癒するまで (医療機関ないし保健 所の判断に基づく。)
教職員等	病気休暇	
それ以外の学校関係者	校内への立入禁止	

なお、本項の状況の下、接触者に感染の疑いのある場合、前項（1）による取扱いを同様に行う。

イ 校長は、校内での感染の疑いがある者について【別添 12】「新型コロナウイルス感染症に関する教育委員会への報告事項」を用いて接触歴等の情報をまとめ、多摩立川保健所（電話 042-524-5171）に相談する。また、学校医への相談、東大和市教育委員会教育指導課（指導主事等）への報告を行う。

ウ 多摩立川保健所の指示による感染者の行動範囲の消毒及び校内での濃厚接触者の特定等を踏まえた上で、臨時休業等の措置を検討する。ただし、保健所等に相談・報告の結果、感染の疑いがある者について出席停止等を行い、校内での感染の広がりがないと判断される場合については、臨時休業を実施しない。

なお、感染した者等の学校内における活動の態様、接触者の多寡、感染経路の明否等を総合的に考慮し、多摩立川保健所と相談の上、学校医と連携しつつ、必要に応じて、休業の実施の有無、規模、期間について検討し、学校の一部または全部を休業する場合がある。

学校の臨時休業の判断については、これらの状況を踏まえ、法第 20 条に基づき、設置者である東大和市教育委員会が行う。

エ 接触者であっても濃厚接触者に特定されなかった児童・生徒及び教職員等については、感染予防策を徹底して行っていたのであれば、原則として、登校は可能と考えられる。ただし、学校は、これらの者に対し、引き続き感染予防策を徹底させるとともに、児童・生徒等については健康観察票を提出させるなどの対応を取り、教職員等には健康チェック表（添付資料参照）の提出により健康状態を把握する。

オ 感染者の行動範囲等について、保健所から消毒の助言がある場合には、その助言に基づき消毒する。また、当該感染者が活動した範囲を特定して、当該感染者が高頻度で触った物品を 8 ページ（5）のウを参考に消毒を行う。

(2) 感染の疑いがあると判明した場合

ア 校長は、児童・生徒や教職員等、学校関係者が濃厚接触者と特定されるなどによる感染の疑いがあるとの情報を得た場合は、症状の有無や経過、学校内における活動の態様、接触者の多寡、感染経路の明否等(注)について、本人等に確認を行う。感染の疑いがある者が児童・生徒等の場合、校長は必要に応じて、学校医や保健所等に相談の上、法第19条に基づき出席停止の措置を、教職員等の場合、事故欠勤により出勤させない措置を、それ以外の学校関係者の場合、校内への立入禁止の措置を行う。

なお、出席停止等の期間は、感染がないと確認できるまでとする。

感染の疑いがある者	措置	期間
児童・生徒	出席停止	感染がないと 確認できるまで
教職員等	事故欠勤	
それ以外の学校関係者	校内への立入禁止	

イ 校長は、感染の疑いがある者について接触歴等の情報をまとめ、多摩立川保健所(電話 042-524-5171)に相談する。また、学校医への相談、東大和市教育委員会教育指導課(指導主事等)への報告を行う。

ウ 原則として臨時休業は実施しない。ただし、校内での集団感染が疑われる場合は、多摩立川保健所等の助言等を参考に、必要に応じて臨時休業を実施する場合がある。

(注) 学校内における活動の態様、接触者の多寡とは、感染者が学校内でどのような行動をしていたか(①屋内の活動かどうか、②屋内であれば、その広さと換気状態、③マスク着用の有無、④接触者数、⑤接触時間の長さ、⑥会話の有無(特に大きな声の場合には注意が必要)、⑦昼食や給食などの食事における状況、⑧部活動などの集団での活動の有無、⑨不特定多数との接触状況など)を指す。

感染経路の明否とは、想定される学校内での感染経路や、学校外での感染経路などが確認できるかどうかということです。(以下、(2)ア、ウにおいても同様)

2 地域の感染状況を踏まえた対応

特定の地域におけるクラスターの発生状況や感染がまん延している場合等によっては、一部又は全ての学校において休業等の措置を行うこともあり得る。そのような場合においても、それぞれの生活圏がどのような状況にあるかを把握し、児童・生徒の学びを保証する観点からどのような対応が必要か検討した上で、きめ細やかに対応する必要がある。

<添付資料>

学校運営に当たってのチェックリスト

項 目	ガイドライン 参考ページ	確認
児童・生徒への指導		
児童・生徒に、健康観察票を渡すなどして、毎日登校前に検温と風邪症状の有無を確認するよう周知しましたか。	10	
感染症基本行動3か条（「3つの密」を避ける、正しいタイミングと正しい方法で手洗いをする、咳エチケットを徹底する）について指導しましたか。	3、4	
マスクの効果や着用する際の注意事項について指導しましたか。	4	
感染症予防のための行動や、感染者等に対する偏見や差別につながる行為をしないこと、医療関係者等に感謝することについて指導しましたか。	3、16	
保護者への協力依頼		
毎朝、保護者や家族も健康観察を行うことや、登校前に児童・生徒の検温結果等を確認するよう依頼しましたか。	5	
登校前に、マスクを着用させるよう依頼しましたか。	5	
新型コロナウイルス感染症の予防などについて通知等により周知し、家庭においても対策を徹底するよう依頼しましたか。	5	
保護者と日中連絡が取れる連絡先を改めて確認しましたか。	9	
感染防止に向けた校内の体制整備・教職員等への周知		
教職員用の「健康チェック票」を準備し、毎朝自宅で検温を行い健康観察を行うとともに、出勤時に健康状態を記入することについて周知しましたか。	5	
児童・生徒の健康観察票の確認等を行う体制を整えましたか。（登校時に確認し、検温をしていない児童・生徒は保健室等で対応する）	10	
校内の必要な個所に、石けんや消毒液、咳エチケットで出たごみ専用のごみ箱、感染防止対策チェックリストを配置しましたか。	6	
感染症が疑われる児童・生徒が発生した場合の校内の連絡体制を整え、別室対応等の場所の確保、ゴム手袋等の準備をしましたか。	11	
マスクの着用、手洗いの励行、「3密」を避けた行動、教室の換気などについて、学級指導や放送等を通じて定期的に注意喚起する準備をしましたか。	15	
登校時の健康観察、手洗い所、トイレ、給食の配膳・下膳など混雑する場所には、互いに距離を空けるよう、立ち位置をマーキングするなどの準備をしましたか。	3、14	
学校給食の実施にあたり、実施内容や方法を工夫したうえで、感染防止のための工夫を行いましたか。	14	
部活動の実施にあたり、実施内容や方法を工夫したうえで、感染防止のための対応を行いましたか。	15、16	
職員室の座席配置や、会議の持ち方について工夫しましたか。	5、6	
その他の留意点		
年間指導計画や学校行事を見直す際には、授業等の質的な改善を図るとともに、学習指導要領に示された内容のバランスを配慮しましたか。	19	
やむを得ず登校できない児童・生徒や、不登校傾向の児童・生徒に対する ICT の活用等による学習指導について、実施計画を立てましたか。	21	

感染防止対策チェックリスト（教室等）

東大和市立第

学校

(場所等)

(月分)

※消毒をした時間を記録する

<div>チェック項目</div> <div>日付</div>		ドアノブの消毒	手すりの消毒	電気のスイッチの消毒	窓枠・窓の鍵の消毒	共用する教材や物品等の消毒
日	曜日	一日一回以上実施する				

健康チェック表

令和 年 月 日

東大和市立第

学校

以下の通り確認しました

東大和市立第

学校 校長

印

[illegible]